

平成 29 年度ユネスコスクール年次報告書

1. 学校概要

学校名 斜里町立朝日小学校 (※正式名称を記載)

種 別 保育園・幼稚園 小学校 小中一貫^{※注1}

中学校 中高一貫^{※注2} 高等学校

教員養成大学 専修学校、各種学校

特別支援学校

その他 (例：小中高一貫)

※注1 義務教育学校を含む ※注2 中等教育学校を含む

所在地 〒099-4114

北海道斜里郡斜里町朝日町6-2

E-mail asahi.kyou@wit.ocn.ne.jp

Website <http://asahisho01.ec-net.jp/>

幼児児童生徒数 男子 93名 女子 83名 合計 176名

幼児・児童・生徒の年齢 7歳～12歳

2. 報告期間

平成29年4月～平成30年3月

※報告書提出時点～平成30年3月末までの活動は、予定(見込み)として記載ください。

3. 活動内容

(1) 活動の概要

当校は、「共生」を学校理念として、ESDを豊かな地域資源や地域人材を生かして地域と学び合う学校教育と捉え、自然との共生プロジェクト、人間との共生プロジェクトの実践を通して汎用的能力の育成を目標とした。

具体的には、先の自然との共生プロジェクト、人間との共生プロジェクトを柱に、①世界自然遺産学習、②地域の産業に係わる学習、③福祉学習、④地域の行事学習を行った。

① 世界自然遺産学習

本校では、6学年総合的な学習の時間において「わたしのまちの世界遺産」というテーマで、「人の暮らしと自然のどちらが大切にされるべきかを異なる立場から考えることで、自らと自然の関わり方について探究していくことができる。」の目標のもと1年間を通して世界遺産知床をフィールドとして探究的な学習を行ってきた。



②地域の産業に関わる学習

本校では、4学年総合的な学習の時間において「しれとこハロウィンへの道」というテーマで、『しれとこハロウィン』について調べたり、計画を立てたりする活動を通して、斜里町を元気にしようとする人たちの思いに気付き、斜里の魅力を再発見するとともに、これからの自分なりの斜里という地域への見方・考え方を広げようとする。」の目標のもと1年間を通して地域の農業やそこに関わる人々について探究的な学習を行ってきた。



③福祉学習

本校では、5学年総合的な学習の時間において「わたしとあなたの心をつなぐ」というテーマで、「認知症を抱える高齢者や地域に暮らす人々と交流し、人との関わり方について考えることで、相手の立場に立つことや、多様なものや個を尊重することについての考え方を広げることができる。」の目標のもと1年間を通して人との関わりや個の尊重について探究的な学習を行ってきた。



④地域の行事学習

斜里町では7月末に「しれとこ斜里ねぶた」という祭を40年弱続けている。本校は、生活科や総合的な学習の時間でねぶた祭の歴史を学んだり、お囃子やねぶた絵の技能を学んだりなどの学習を行っている。これから地域に生きる人間として地域の文化の持続可能性に関する知識を身にことや、そこに興味・関心をもつ態度や意欲を養うことを目標として行っている。



(2) 活動の詳細

①活動内容

○世界自然遺産学習

知床は世界自然遺産という側面と観光地という側面がある。また、知床には人の手が入ることで自然を失い、また人の手を加えて自然を取り戻してきたという歴史がある。児童が実際に知床の自然に触れ、様々な人と出会う中で、これからの自分と自然との関わり方について、豊かな体験を通して学んでいった。

「人と自然は共存できるのか」という大きな問いに対して、児童は森・川・海とそれぞれのフィールドで体験し、感じたことや学んだことをまとめていった。そして、斜里町民だからこそ伝えたい知床斜里の魅力や改善点を、斜里町役場の協力を得てポスターにして発信した。また、学習の成果を国語科と関連して意見文という形で表現した。

○地域の産業に関わる学習

もともと収穫を祝う行事であったハロウィンを、斜里町の農業と関連して行いたいと立ち上がった地域の人とともに、カボチャの栽培方法を農家の方に聞いたり、ハロウィン祭でどのようなことを発表するか考えたりなど、地域の産業について探究的な学びを行ってきた。

学校と農家の方の畑の2箇所では同じかぼちゃを育てていった。プロの農家の方の育て方はもちろん児童よりも上手で、時折かぼちゃの様子を見に行くとその違いに驚く。そこから、児童がもっと大きく育てたいと調べ学習を始め、栽培活動に生かしていった。

10月には斜里町の道の駅で「しれとこハロウィン」のイベントを行い、その祭りの一部分の時間を使って今までの学びをクイズ形式にしたり、劇にしたりと表現の仕方を工夫して発表した。農家の方の苦労や斜里町には豊かな農作物があることがわかったという内容が発表された。

○福祉学習

学区内の高齢者施設にて、年齢や認知症の症状といった自分との違いのある人との関わりを通して、人と人との関わり方について見つめ直していった。

3度の高齢者との交流会を行った。交流会後には、振り返りを行い、次の交流会の目標を決めていった。楽しませるためだけに行っていた交流が、共に楽しんだり、高齢者のことをもっと知ろうというかわりになったりなど、振り返りのたびに、かわりの質が高まっていった。

児童の多くは、学習当初に抱いていた認知症の高齢者と心を通わすことは難しいという印象が変わり、違いはあれど本質的な人との関わりには違いがないことに気付いたと学習を振り返っていた。

○地域の行事学習

1～2年生はねふた絵に使われる染料や墨を使った絵を描いたり、それを観光客の方にプレゼントしたりなど、図工科と生活科を関連させて学習した。

3～6年生は、地域のねふた保存会の方をゲストティーチャーにお招きし、笛や太鼓、じゃがらきといったお囃子の楽器を演奏したり、立ち行灯、金魚ねふた、大型ねふたの制作にあたりたりなど、斜里の文化について探究的に学習した。

ア. 活動分野（複数選択可）

<input checked="" type="checkbox"/> 1. 環境	<input type="checkbox"/> 2. エネルギー	<input type="checkbox"/> 3. 防災	<input checked="" type="checkbox"/> 4. 生物多様性
<input type="checkbox"/> 5. 気候変動	<input type="checkbox"/> 6. 国際理解、文化多様性	<input checked="" type="checkbox"/> 7. 地域の伝統文化、文化遺産	<input type="checkbox"/> 8. 人権・平和
<input checked="" type="checkbox"/> 9. 健康・福祉	<input checked="" type="checkbox"/> 10. 食育	<input checked="" type="checkbox"/> 11. 持続可能な生産と消費	<input type="checkbox"/> 12. 貧困
<input type="checkbox"/> 13. エコパーク	<input type="checkbox"/> 14. ジオパーク	<input type="checkbox"/> 15. グローバルシチズンシップ教育 (GCED)	
<input type="checkbox"/> 16. ジェンダー平等	<input type="checkbox"/> 17. その他()		

イ. 活動を通して育みたい資質や能力（複数選択可）

<input checked="" type="checkbox"/> 1. 批判的に考える力	<input type="checkbox"/> 2. 未来像を予測して計画を立てる力
<input checked="" type="checkbox"/> 3. 多面的、総合的に考える力	<input checked="" type="checkbox"/> 4. コミュニケーションを行う力
<input checked="" type="checkbox"/> 5. 他者と協力する態度	<input checked="" type="checkbox"/> 6. つながりを尊重する態度
<input checked="" type="checkbox"/> 7. 進んで参加する態度	
<input checked="" type="checkbox"/> 8. その他(多様な見方・考え方を働かせて問題を解決する力)	

ウ. 活動時間（複数選択可）

<input checked="" type="checkbox"/> 1. 教科の時間	<input checked="" type="checkbox"/> 2. 総合的な学習の時間
<input type="checkbox"/> 3. 特別活動等	<input type="checkbox"/> 4. クラブ活動
<input type="checkbox"/> 5. その他(自由記述)	

エ. 使用した教材（書籍、ウェブサイト、パンフレットなど具体名）

<p>①教材・教具 高齢者体験キット、高齢者交流グッズ、農作業用具、種苗、各種ワークシート、ロウ、染料、和紙、お囃子の楽器など</p> <p>②書籍 ・辰濃和男・関根郁雄・深沢博（2010）『よみがえれ知床』朝日新聞出版 ・午来昌（2007）『大地の遺産 知床からのメッセージ』響文社 ・中川元（2006）『世界遺産・知床がわかる本』岩波書店 ・財団法人知床財団（1998）『設立趣意書』 ・財団法人知床財団（2015）『しれとこの森通信』 ・財団法人知床財団（2015）『2014年度活動報告書』 ・斜里町（2014）『第6次斜里町総合計画』 ・母嶺レイ（2007）『知床開拓スピリット』柏艚舎</p> <p>③ウェブサイト http://www.unesco-school.mext.go.jp/ （ユネスコスクール公式ウェブサイト） http://www.shiretoko.or.jp/ （財団法人知床財団ホームページ）</p>
--

- ① ユネスコスクールとしての活動を各校の教育課程（指導計画）にどのように位置付けているか。指導内容を適切に定め、指導方法の工夫改善に努めているか。（200～300字程度）

※チェック事項 1-2, 1-3 に対応

学んだことは国語科の各領域と関連しながら取材・報告・表現したり、社会科と関連しながら資料から情報を適切に調べたりなど、教科横断的な視点で学習できるよう指導計画を立てている。

学習活動が似ているというものだけでなく、今後どのような力を働かせて学習活動を遂行していくのかを整理していく必要がある。その際に、ESD の観点で整理していくことで、効果的に児童に力を付けていくものと考えている。

【知識及び技能】	【思考力・判断力・表現力等】	【学びに向かう力、人間性等】
国語科「国語の楽しさを味わうこと」 国語科「国語の楽しさを味わうこと」 国語科「国語の楽しさを味わうこと」 国語科「国語の楽しさを味わうこと」	国語科「国語の楽しさを味わうこと」 国語科「国語の楽しさを味わうこと」 国語科「国語の楽しさを味わうこと」 国語科「国語の楽しさを味わうこと」	道徳「自然をこよなく愛した人」 道徳「富士山を世界遺産に」 道徳「美しいものを探して」
社会科全般 国際社会における我が国の役割 道徳的素養を通して、信頼を築くこととめる経験	社会科全般 社会科各単元の相互の関連、意味を多角的に考える力	社会科全般 よりよい社会を考えたことと、社会生活に活かそうとする態度 将来を担う国民としての自覚

※6年生総合 他教科等の関連

- ② 学校全体で組織的かつ継続的に活動に取り組める体制や環境をつくるため、どのような取組を行っているか。（200字程度）

※チェック事項 1-4 に対応

教務係が中心となって、教育課程編成を行っている。その際に、教科横断的な視点と地域の人的・物的資源をいつ・どこで・何を活用するかこの視点で指導計画会議を4月と3月に行い、計画と見直しを繰り返して教育課程を編成していく体制をつくっている。

また、来年度からコミュニティ・スクールになり、地域コーディネーターの方も教育課程の編成に関わっていただき、より地域の教育資源を活用した学習活動を展開できる体制を構築していく。

- ③ ユネスコスクールとしての活動の質の向上のための学校活動の評価（内部/外部）の方法・具体的内容と、それによって明らかになった成果と課題。（200字程度）

※チェック事項 1-5 に対応

毎年行っている学校評価や全国学力学習状況調査の児童質問紙等で、当該回答の傾向を分析している。

学校評価では「学校は、地域の資源や人材を活用し、特色ある教育を行っている。」との質問に、保護者は80%以上、教職員は100%「当てはまる」との回答を得ている。

保護者と教職員との意識に差異があるので、より学校がユネスコスクールの理念に則って指導していることを発信したり、児童の実感や結果として表すことができるようにしていく必要がある。

- ④ ESD の推進拠点としての活動成果の発信方法・内容と、発信により得られた効果。(200字程度) ※チェック事項 2-2 に対応

ESD の観点を含めて指導計画を立てた生活科・総合的な学習の時間の授業公開を行った。「第 27 回北海道生活科・総合的な学習研究大会」として全道から 200 名近くの参加者・関係者に授業実践の様子を公開し、その授業のあり方について協議を行った。6 学年全ての授業が自然との共生、人間との共生プロジェクトの内容であり、この研究大会でいただいた意見を指導計画立案の際に生かしていくことができた。

- ⑤ 学校以外の団体との協働・交流・ネットワーク形成(地域コミュニティ、大学、ESD 活動支援センター、ESD コンソーシアムとの連携など)
(200字程度) ※チェック事項 2-3 に対応

交流する時間や人手が確保できず、またその方法もしっかりと把握していなかった。今後、教育課程を編成する際に視野に入れて考えていきたい。

- ⑥ 国内外のユネスコスクールとの交流・ネットワーク形成(200字程度) ※チェック事項 2-4 に対応

交流する時間や人手が確保できず、またその方法もしっかりと把握していなかった。今後、教育課程を編成する際に視野に入れて考えていきたい。

- ⑦ ユネスコスクールの活動による効果について、特筆すべき（特に強調したい）内容（例えば児童生徒、教員、カリキュラム・教授法、学校経営、地域・保護者との関係など様々な面でのポジティブな変化）（200字程度）
※チェック事項 2-5 に対応

ESD の観点で単元・授業作りの中で生かされるようになった。地域の教育資源を活用して学習を展開するなど、従来の指導計画からより効果的な学習になるように改善して指導を行う担任が増えた。

6 学年の児童では「地域の行事に参加していますか」の質問に 94.0% が当てはまる（全国 62.6%）、「地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがありますか」の質問に 60.6% が当てはまる（全国 42.3%）と ESD の取組の成果により意識が高まっていることがわかる。

(3) 平成 30 年度の活動計画（200～400 字程度）

自然との共生、人間との共生プロジェクトの活動の取組を新たに増やすよりも、一つ一つの取組を充実させていくことが必要と考える。

- ① コミュニティ・スクール導入による、地域の方々と共にカリキュラムを考える指導計画会議を行う。
- ② 学校行事に代表される特別活動を ESD の視点で捉え、児童に身に付けるべき資質・能力の整理を行い、それぞれの行事のねらいを精選する。
- ③ 総合的な学習の時間を筆頭に、学びの場を広げ、より効果的な学習に資するような地域の人的・物的資源の調査を行う。また、その際に同じユネスコスクールの学校や機関を活用できるよう調査を進める。